

眞昼の罅

● 出世コースと情事と殺人

黒岩重吾



眞 屋 の 毘

著 者 黒 岩 重 吾

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社
会社

東京都新宿区矢来町71番地
電話東京 (341) 7111—9番
振 替 東 京 8 0 8 番

印 刷 所 株式会社 金羊社

製 本 所 神田加藤製本所

定 価 2 2 0 円

著者との諒解
により検印を
廃止致します

1962年 2月15日 発行

1962年 3月20日 2刷

乱丁、落丁本は本社又
はお買求めの書店にて
お取替えいたします。

黒岩重吾

眞昼の罨

ポケット・ライブラリ

21

新潮社版

真昼の罌

Ⅱ 出世コースと情事と殺人

女医の情事

1

千代田金属の調査課は五時の定時を前になんとなく、疲労の色が室内にただよっていた。千代田金属は資本金百二十億、超一流の金属会社である。調査課はそのブレーンであった。吾国鉄鋼市場の分析から、世界市場の動向、更には現在のもろもろの景気まで予測せねばならない。営業課のように華やかではないが、頭脳を存分絞らねばならないのだ。だから、課員達の能率が最も上るのは、出社して一時間たった十時頃から、正午までである。とくに、退社前の一時間は全く能率が上らなかった。

それが当然であつた。課長の見山もそれを心得ていて、その時刻は用事がない限り、外来者と会うことにしていた。

見山は課員達からは、思いやりのある課長として通っている。

調査係長藤悟は、十年先の大径管の需要見通しについて報告書を作成していた。

鉄鋼各社は増設増産に狂奔し、国内資金では足らず、世界銀行から数百億の借り入れを行

っている。

藤の見方では、どうも供給が需要をオーバーしそうであった。一仕事終えて藤は大きく伸びをして、煙草をくわえた。

藤悟は三十二歳、係長クラスでは最も若手であった。色白の端正な顔をしていた。切れ長の眼に何処か冷たい翳^{かげ}があるが、それが藤の美貌を現代的に引き締めていた。

最優秀校T大を出て八年、藤の頭脳の冴えは、幹部には定評があった。云わば藤の前途には鋪装された白い道路が、陽の光りに輝いて、まっ直ぐ伸びているのである。

電話のベルが鳴ったので、煙草をくわえながら藤は受話器を取った。なんとなく、霞^{かすみ}尚子から掛けて来たような気がした。もう会わないと云い、藤もそれを承認したのだが、それが空しいものであることは、藤自身良く承知していた。

交換手が霞さんからお電話です、と告げた時、藤は無意識にくわえていた煙草を灰皿に置いた。

「もしおよろしかったら、今夜何時もの喫茶店で六時にお待ちしています」

何時の場合でも、尚子は余分なことを云わない。とくに社に電話をかけて来た時はそうであった。

「分かりました」

と藤は短かく云って受話器を置いた。それ以外に答はなかった。藤はまだ霞尚子と最後の

線は越えていない。藤は今まで数多くの女と関係したが、身体を知ると直ぐ別れた。

身体を知るまでが、相手の女との交際の期間であつた。

俺がもし尚子の身体を知れば、俺はあの女と別れられるだろうか。自問して藤はそんなことを思ったことに驚いた。今まで、そんな先のことを考えた女は、一人も居ないのだ。

霞尚子を知ってから、藤の生活のテンポは確かに狂つたようだ。

今まで手を出したことの無い株に手を出し、しかも素人なのに信用買をして、貯金の大部分をすってしまったことも、その一つである。

霞尚子との交際には、食事をするにも、一流のところに行かねばならないし、ナイトクラブにしても同じことであつた。

単に見栄のためではない。霞尚子は、一流の場所しか似合わない、贅沢さを、美貌や外見だけではなく、その内部に持つていた。

尚子は、大会社の係長が、一体幾らの月給を取っているのか、知っているのであろうか。

藤はなんとなく苦笑して、周囲を見回した。大学を優秀な成績で出た、日本の選ばれた若者たちは、明らかに疲労を顔に浮べ、ぼんやり椅子に坐つていた。

熱心に事務を取っているのは、女子社員であつた。確かに千代田金属の女子社員は実に良く働いた。そのくせ、会社を動かして発展させる仕事は、殆んどしていない。女って、そんなものだ。藤の女性観はそんなところにも現われていた。

それだから、霞尚子に対する自分の煮え切らない気持が、藤にはいまいました。

藤の眼は、部屋の中央で仕事に没頭している古谷信幸にとまった。古谷と藤は学校も入社も一緒であった。が、四年前、現在の好景気に対する予測を古谷は否定したのであった。

会議の席上二人は、渡り合った。藤に押され勝ちな古谷としては、最後の反撃であったに違いなかった。その予測の失敗が、係長と平社員という、徹底的な差をつけてしまったのである。

それにあいつは、赤塚弥生に惚れているらしい。派手な美貌で金と一人の子供がある、未亡人の女医。藤にとって、赤塚弥生は、開き過ぎて、散る前の花にしか過ぎなかった。

ふと藤は、尚子とのデートの資金がないのに気付いた。給料まで、まだ一週間ある。

藤は、下腹部に贅肉のついた白い弥生の身体を思い出しながら、その資金を弥生に借りることを決めた。

尚子と会うまで、あと一時間半、それ以外に手はないようであった。

藤は何気なく立ち上ると、出口の方にゆっくり歩いて行った。古谷が顔を上げて、藤を見た。

古谷の縁の細い眼鏡は、ごつい顔に似合っていない。なにか話があるのか、古谷は思いついたように、藤のあとを追って来た。

「君に少し話があるんだ」

と廊下で古谷は云った。

「ふーん」

と藤は気のない返事をした。

「今夜暇か」

「いや、いや、一寸用事がある。ここで云えよ」

「こみ入った話なんだがな」

「アットラインだけで良い」

「実は赤塚さんのことだ」

藤は始めて、古谷の顔をじつと見た。色が黒く顎が張っている。と云っても別に醜男がうとこではない。見方によればインテリ臭い顔であった。鼻も高く、ごつい顔に似ず唇は薄く恰好が良い。

先ず及第点であった。ただ難を云えばこれと云った魅力がないことであつた。こんな男は、それ相應な娘と見合結婚が似つかわしいんだが、と藤は思った。

「古谷君、これだけははっきりしておくけど、僕は赤塚先生に関しては君に相談を受けるようなことは、なにもないぜ」

「いや、それを聞いて安心した。実は……」

「おっと、その先は結構だ。僕は他人のプライベートなことには、関心がないんだよ」

古谷の顔が赤くなった。怒りと恥辱の入り交った顔であった。同僚だが、相手が係長というだけで、古谷は引けめを意識していたようであった。藤の態度は、古谷のそんな気持を、更に傷つけたのだ。

「じゃ」

と云って、藤は見向きもせず歩き出した。あと三年すれば、藤には課長の椅子が予約されていた。その時古谷は係長になるだろう。更に数年たち藤が部長になった時……歩きながら藤は呟いた。あいつは矢張り係長で居るだろう……と。

2

赤塚医院は千代田金属の直ぐ傍にあった。社員達、とくに男性社員は、一寸気分が悪いと赤塚医院を訪れたがった。社内の医務室のオールドミスの看護婦や老医より華やかな美貌の女医に診察される方が、生理的に楽しいのは無理はなかった。

赤塚弥生は三十二歳であった。月丘夢路を派手にしたような顔で、バラの花の感じがあつた。濃艶なこぼれるような微笑を浮べ、男性関係もなかなか放埒ようちやうであった。

千代田金属の社員で、弥生と関係しているのは、藤以外に何人居るか分らない。それは藤の勘である。ただ弥生は関係した男の名前は絶対喋らない。それがまた赤塚医院を、繁盛さ

せている原因であつた。

今の世の中で、秘密を守れる女というのは、確かに信頼して良かった。

藤は表入口ではなく、通用門から外に出た。すでに陽はビルの彼方に落ちていた。

藤は素早く周囲に眼を走らせ、知った顔のないのを見澄まして、赤塚医院がある通りへ曲ろうとした。が、彼は本能的に一歩しりぞいた。

ちらつと見ただけだが、今赤塚医院から出て来たのは課長の見山であつた。中背の小太りの身体に特色があつた。藤は大急ぎで表通りに出た。

都電がのろのろ走っている。一寸南に行けば銀座であつた。北は日本橋から須田町を通る都電であつた。藤は電柱に隠れるようにして見山が出て来るのを窺つた。

見山が通用門に入つたのを見届けて、藤は再び歩き始めた。

見山がこの時刻に、赤塚医院を訪れていたということは、一寸意外であつた。身体の調子が良くなかつた、ということも考えられるが、もつと別な理由がありそうだった。

四時半という時間は、弥生にとっては、最も暇な時刻である。午睡から眼覚めて、風呂に入っている時間であつた。

玄関の戸を開けると、医院らしく薬の匂いにする。赤塚医院は父の時代から、ここで開業していた。弥生の死んだ夫は養子で、平凡なサラリーマンであつた。

人の気配がしないので、藤は、御免、と大きな声を出した。看護婦が受付の小窓から顔を

出した。

「先生居る？」

「はい」

看護婦が引込むと同時に、「どなた？」と弥生の声が聞えて来た。風呂には入っていないな、と藤は思った。この時彼は、見山と弥生が、昼下りの情事を楽しんだ、という微かな疑惑を否定出来た。

弥生は朝から風呂をわかつており、情事のあとには、必ず入るくせがあった。

藤は庭に面した座敷に通された。小さな庭だが、古ぼけた石燈籠もあり、一応体裁は整っていた。ただ陽の当りが少なく、樹葉は生気がない。だから最も明るいこの座敷でさえ四時を過ぎると電燈をつけねばならなかった。

「こっちにいらっしゃいよ」

弥生は廊下の椅子に腰を下ろした。サモンレッドのメリヤスジャージの半袖ブラウスを着ていた。スカートはベージュのタイト。

派手な顔に良く似合った色彩であった。こんな陰気な医院で、弥生は一人の子供をかかえ、どんな気持で毎日を過しているのか。

弥生と関係したのは二回だが、藤は弥生の内部には全然立ち入らなかった。

「もうそろそろ退社時刻でしょう。間もなく、あなたの社の患者さんが来ますわよ」

「まだ三十分あります」

と藤は腕時計を見て云った。色が白く眼も眉も鼻も、知的に配置されている。が、唇だけが横に長く顔をぱっと華やかにしていた。そして中年の女の深い色気も、その変に痴呆的なその唇にあった。

弥生はそれを知っていて、薄い口紅を切らしたことがない。

「今日は一寸お願いがあるんですよ」

金を借りる時は早く切り出した方が気持良かった。

「藤さんをお願いなどと云われると怖いわね」

「怖いですよ、二万ばかり二十五日まで拝借したいんですよ」

と云って藤はつけ加えた。

「今夜豪遊するんですよ、少しあるんですが足らなかったらいけないので」

と云って藤は微笑した。学生時代から金を借りた経験はあるが、相手はみな女であつた。

男からは一度もない。藤に取って同性はみな敵であり、味方は異性ばかりであつた。

「ほんとに怖いお話ね」

と云って弥生はフィルターつきの洋モクをくわえた。藤はライターを出して火をつけてやった。彼はこの時、弥生の眼が笑っていないのを知った。

「いや、だめならいいんですよ。社で借りれば良いんだから」

「どうして私に？」

と云つて弥生は藤を見た。藤との二度の情交は弥生の心に、いささかの影もおとしていないようであつた。この女は、俺と寝たことを忘れてゐるのかもしれない、と藤はふと思つた。この時、彼は始めて屈辱を感じた。

「急に豪遊したくなりましてね、あなたのところが距離的にも時間的にも一番近かつたから、ただそれだけですよ」

弥生と寝たから借りに来たのではない、ということを藤は、はつきり匂わした。藤の言葉は弥生に安心感を与えたようであつた。

「光栄ですわ、御用立します。形式だけど借用証を書いてね」

と弥生はねだるように云つた。藤は弥生の警戒心に驚いた。こいつは俺が思つていたよりずっとしっかりした女だ、と藤は感嘆した。

でも弥生のそんな性格が、再婚を邪魔しているのかもしれない。

3

弥生は藤が名刺の裏に書いた借用証を受け取ると、腕時計を見た。

「まだ退社時間まで二十分ありますわ、別にお急ぎじゃないんでしょう？」

藤は弥生の唇に欲情の匂いを嗅いだ。彼は何故か、霞尚子とのデートを思った。今まで尚子と会っている時は、欲情が満ち、抱きたいと思ひながら果されず、苛々した気で別れていた。ふと藤は欲情を洗い流して尚子と会ったら、別な気持ちで尚子と接しられるような気がした。尚子に対する自分の気持ちも掴めそうな気がしたのだ。藤は立ち上ると弥生の両頬を掌ではさんだ。

「二十分で燃えられる？」

弥生は眼を閉じ藤の掌を外側から静かになでた。爪先を皮膚にふれるかふれないようにして上下した。それは弥生の肯定を現わしていた。藤は男の手の甲にも性感帯があるのを始めて知った。金銭の貸借にまつわる非情緒的な雰囲気は、弥生の簡単な行為によって、断絶したようであった。

藤に両頬をはさまれた時から、弥生は完全なめすに成り切っていた。弥生こそ、ほんものの享樂家であつたようだ。

藤は顔を下げ、弥生の唇に唇を静かに当てた。弥生は一寸藤の顔を放し、舌で軽く自分の唇を潤おすと、真綿のように柔かく唇を押しつけて来た。藤はブラウスの襟えりから手を入れ、弥生の乳首をさぐつた。

「指を当てるだけにして」

子供を生んだにも拘らず、弥生の乳房は余り垂れていない。母乳で育てなかつたためであ